

# 千葉県内における板碑研究の現状と課題

齋 木 勝

## 1. 緒言

過日、友人から県内の石造物の時代的変遷について問われたことがあった。近年、城館跡等を調査すると堀などから、五輪塔の空・風輪や宝篋印塔の相輪部が投げ込まれた状況で、出土する例がある。出土した石塔の各部材は時代の特徴も顕著ではないが、大まかに時代を捉えられたらということであった。

石材を用いたこれらの塔婆は、構造物として構成されて一つの位置付けがなされている。紀年銘や石塔の主尊が確認できない場合は、大変難解である。例えば五輪塔は火輪の軒がより緩やかに反る場合は鎌倉時代で、江戸時代になると反りが強くなるとか、格狭間の形状も緩やかな曲線表示が古い様相であり、新しくなると、締まりがなくなると言われている。

県内で確認されている石造物には、五輪塔、宝篋印塔、層塔などがあるが、それほど造立数は多くなく、時代の特徴もなかなかわからない場合が多い。その中で板碑は検出例が多く、また、遺跡より出土する例も報告されている。

本稿は石造物の時代的変遷という観点の中で、千葉県内の板碑を取り上げ、その造立の概要を報告するとともに研究の現状と課題を検討するものである。

## 2. 研究動向

### (1) 市町村板碑調査

全国的な動向をみると、市町村による板碑資料の集積刊行は、1970年代後半から1980年代前半にかけて活発であった。実態をみると、当初から地元で板碑調査に携わってきた調査員が刊行にも係り、研究者の裾野を広げることになったのは、板碑の保存を考えるとよい結果になった。これは千々和実による「武蔵国板碑集録」の刊行<sup>1)</sup>を背景として、その後同じく千々和による「東京都板碑所在目録」の作成<sup>2)</sup>、また、1980年代は埼玉県板石塔婆の悉皆調査<sup>3)</sup>、いわゆる武蔵型板碑の総合調査が実施されており、調査が盛んになった時

代であった。

県内の板碑調査は市町村史編纂事業の中で実施されたものが多い。1960年代に野田市<sup>4)</sup>、1970年代に、同じく野田市<sup>5)</sup>、船橋市<sup>6)</sup>、印西町<sup>7)</sup>(当時)、1980年代に、松戸市<sup>8)</sup>、八日市場市<sup>9)</sup>、芝山町<sup>10)</sup>、鎌ヶ谷市<sup>11)</sup>、市原市<sup>12)</sup>、再び野田市<sup>13)</sup>、関宿町<sup>14)</sup>、1990年代は、市川市<sup>15)</sup>、下総町<sup>16)</sup>、神崎町<sup>17)</sup>、大栄町<sup>18)</sup>、2000年代になると天津小湊町<sup>19)</sup>が資料集を刊行した。

### (2) 概要

県内の板碑研究史については、川戸彰<sup>20)</sup>、清水長明<sup>21)</sup>により著わされている。本稿では改めて原稿を焼き直す愚をやめ、学史的な視準となる研究を紹介したい。

1970年に千葉県史編纂室が『千葉県金石文所在目録』で県内悉皆調査の成果を集成し、それに基づき1975年に『千葉県史料、金石文篇Ⅰ』を、1978年に『千葉県史料、金石文篇Ⅱ』を、1980年に『千葉県史料、金石文篇Ⅲ』を刊行した。これによって板碑は全県的にほぼ網羅されたのである。

『千葉県史料、金石文篇Ⅲ』で篠崎四郎は、県下の石造物の悉皆調査の成果を解説している。その中で板碑に関してまず、石材に着目し、在地の石材を利用した石塔婆を板碑として認め、県南の16世紀中頃の塔婆もその亜流品と位置付けている。下総型板碑を石材から黒雲母片岩、粘板岩、白亜紀砂岩とし、その分布を香取、海上、匝瑳、印旛、山武郡の北部、旧千葉郡、東葛飾地区とした。主尊は、阿弥陀一尊(図版1-1)が最も多く、次いで阿弥陀三尊(図版2-10)が続く、双式板碑(図版1-7)は阿弥陀信仰が抜きん出ているとしている。その他大日如来、釈迦如来の造立数を捉え、題目板碑(図版2-11, 13, 15, 図版3-27)は香取郡多古町、栗源町、佐原市、山武郡に多く確認され、南北朝時代以降、室町時代にピークを迎え桃山時代に及ぶとしている。また、碑面には天蓋、璽珞を飾り、蓮座を刻む。また、花瓶が少ない点を指摘している。偈は「観無量寿経」が最も多い。図像板碑は阿弥

陀如来を表わしたものが多い他に、15世紀中葉以降、16世紀初頭にかけて図像の身体に当たる部分に衣で巻くように「阿弥陀仏」の文字を配した特異な板碑（図版4-34）の造立を報告している。

1984年、清水長明は下総型板碑の特徴を以下のように捉えている<sup>22)</sup>。

- ・双式板碑が多い。
- ・十仏・十三仏種子板碑の出現が早く、数が多い。
- ・図像板碑が多彩で梵字不動像や文字阿弥陀像の異色のものがある。
- ・題目板碑が多い。
- ・偈が多く、一基に二つを刻むものがある。
- ・五大種子（キャ・カ・ラ・バ・ア）を刻むものが多い。
- ・天蓋が多く、そのデザインは多様である。

- ・台座がみられる。
- ・虚空蔵種子の板碑が多い。

また、板碑の形態を①山形、二条線で武蔵型板碑の形状、②武蔵型板碑の形状を2基枠線で双式板碑として表記、③不整形板状板碑、④双頭の双式板碑の4形式に分類している。これらから二尊種子や双式板碑が多いことに着目し、逆修供養を夫婦がともにするという信仰習俗が鎌倉時代後期に香取一帯に定着し、全期を通じ、追善の習俗を加えて生き続けたことを指摘している。また、文永期（1264）頃から「結衆」という銘が現われ、「一結衆」「念仏衆」「契約衆」など講集団の紀銘もあったとした。

1992年、早川正司は、県南の鴨川市に集中して確認される板碑を報告した<sup>23)</sup>。陽刻五輪板碑、彫像板碑、種子板碑、題目板碑等160基である。石材は地元産の蛇紋岩で、造立の最盛期は天文期から永祿期で、最末期



第1図 遺跡位置図と図版板碑所在位置図

は慶長元年(1596)。16世紀初頭に陽刻五輪板碑が多数造立される。在銘のほとんどは法名を伴い、二親や縁者の追善を主眼とするという。

阪田正一は近年題目板碑の研究を深めている。一連の「考古学論究」誌上に発表した諸論<sup>24)</sup>では、いわゆる方形板状の下総型板碑の素材に着目し、碑文と板碑の本尊構成の関連を論述している。また、日蓮宗、中山門流における板碑造立供養の作法に触れながら、板碑碑面の本尊構成が日蓮染筆曼陀羅を原本とした字形であったとしている。

石井保満のその労力と行動力に基づいた下総型板碑の研究業績は多大のものがある。2001年5月に自費刊行した『資料集 佐原市所在の下総型板碑 - 年号の読み取れるもの -』に凝縮している。氏は主に「史迹と美術」<sup>25)</sup>、「千葉県立大利根博物館調査研究報告」<sup>26)</sup>に論文を発表している。

### 3. 時代的造立の概要 (第2図)

1980年、篠崎四郎は下総型板碑659基の時代的増減表を作成している<sup>27)</sup>。それは10年間の板碑造立数を捉え、1250～1620年にかけて表示している。

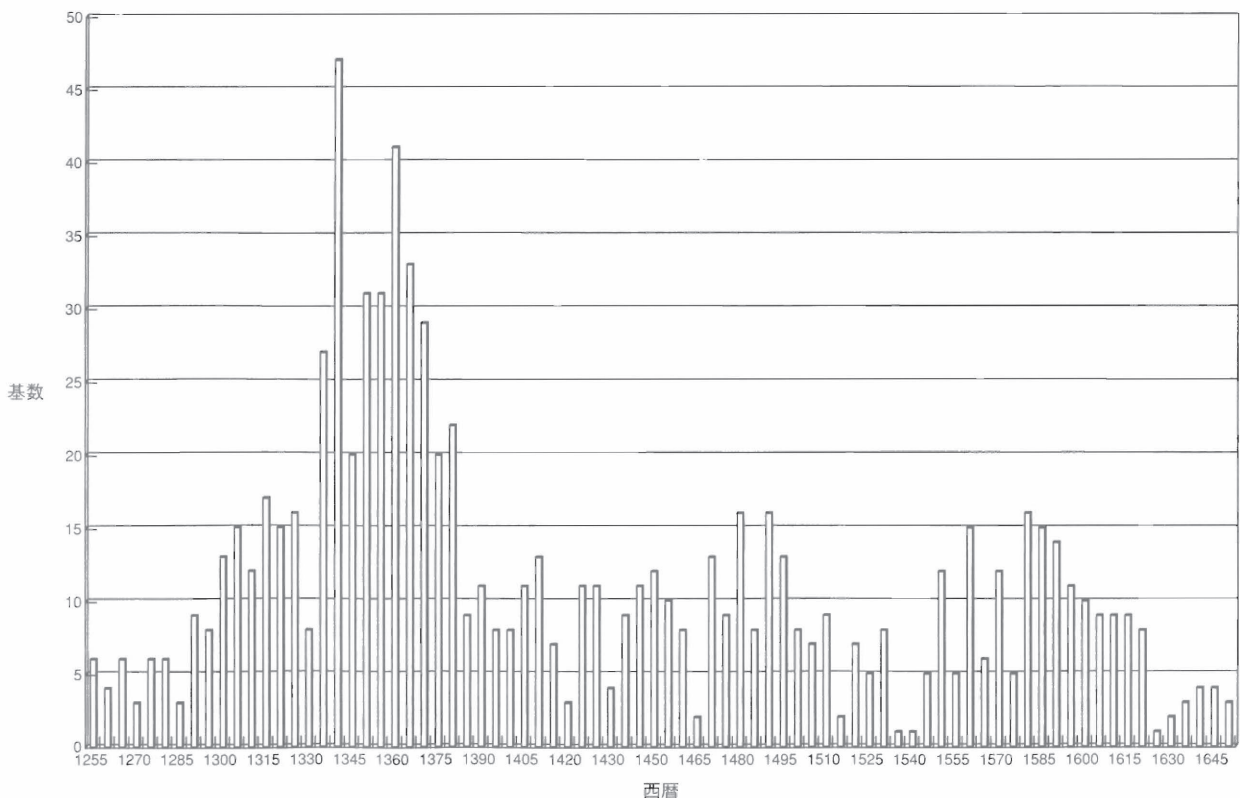
篠崎が指摘した事項は、

- ・1250年から1280年まで造立数はほぼ横這い

- ・その後、1340年代に造立数が上昇する。
- ・1360年代、康安、貞治、応安年間がピーク
- ・以下、造立数は下降線をたどる。
- ・1440年代と1590年代に増加
- ・寛永年間に姿を消す。

20年後の今日、本稿では新たに紀年銘の確認される340基の板碑を加えてその変遷を捉えてみる。詳細な造立数を把握したいため、5年単位での変遷を試みた。それは第2図である。それによると以下の指摘がなされる。

- ・板碑は1255年代(正元)から1315年代(正和)まで徐々に造立数が増加する。
- ・下総型板碑のピークは、1340年代(暦応・康永)であるが、直前の1330年代(元弘)の造立は極端に少ない。
- ・一旦1345年代(貞和)に減少するが、第2のピークとして1360年代(康安・貞治)に再び増加する。
- ・その後、1385年代(至徳・嘉慶)には、ピーク時の1/4の造立数に減少する。
- ・1400年代(応永)から1620年代(元和)まではほぼ横這いの造立数であるが、大きく見ると、1480、1490年代(文明・延徳)と、1560年代(永祿)、1580年代(天正)に造立がやや増える傾向である。



第2図 下総型板碑の造立数変遷

・それに比べ1420年代（応永後期）、1435年代（永享）、1465年代（文正）、1515年代（永正後期）、1535年代（天文前期）は極端に少ない。

この5年毎集計による板碑の造立数を見ると造立が全く止む期間のあることを確認できる。勧進により板碑を造立した時代、また、その活動のない間は板碑の造立がないという結果であろうか。

#### 4. 出土板碑等の諸相

近年、遺跡から板碑を出土する例が増えている。分布を考える意味において注意する必要があるのでここに紹介したい。

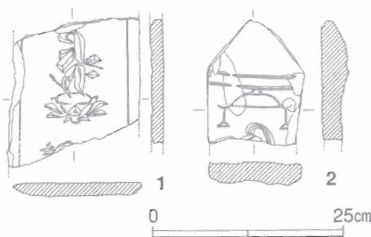
##### (1) 大慈恩寺出土の板碑群（第3図）

香取郡大栄町吉岡にある大慈恩寺には、板碑が43基確認される<sup>28)</sup>。数的には圧倒的に黒雲母片岩製の下総型板碑が多い。

1991、1992年、香取郡市文化財センターにより大慈恩寺寺域確認調査が実施され、その際、2点の板碑が出土した<sup>29)</sup>。1は緑泥片岩製の武蔵型板碑で阿弥陀一尊種子と蓮座を認める。塔勢から14世紀の中頃と思われる。2は砂岩製で山形の頭部の下に二条線と天秤状の天蓋と阿弥陀種子の一部を認める。石質より利根川下流域に産する白亜紀砂岩を用いたものである。

寺域に確認される下総型板碑の紀年銘をみると永仁（1293）から応安五年（1373）であるところから13世紀末より下総型板碑が造立し始め、一部ではあるが14世紀の中頃に武蔵型板碑も用いられたようである。15世紀になると砂岩を用いた板碑の造立が行われていたと考えられる。

町史<sup>30)</sup>の中ではこの砂岩製板碑を、いわゆる南房総型板碑としているがこれは全くの間違いで、在地型板碑そのものである。このように単に形状が近似しているからと無批判的に型式を与える考えはどのようなものか、周辺の石塔を概観すれば、東総地域からの在地型板碑の搬入であることは明らかである。



第3図 大慈恩寺出土の板碑群（1/10）（黒沢1993）

##### (2) 台遺跡出土の板碑群（第4図）

台遺跡は香取郡栗源町沢に位置し、九十九里浜からほぼ北へ20km、利根川から南へ12km、印旛沼から東へ約18kmの北総台地のほぼ中央部に所在する<sup>31)</sup>。1、2は緑泥片岩製の武蔵型板碑、3は黒雲母片岩製の下総型板碑、4～7は、泥岩製の自然石板碑である。

従前、武蔵型板碑は、大栄町吉岡－多古町次浦－松尾町古和を結ぶ線を分布上の東限と認識されていた<sup>32)</sup>が、それよりも東方の沢地区で発見されている。1の武蔵型板碑は、主尊阿弥陀一尊種子と蓮座のみを刻み、頭部は山形で基部は据え付けるためやや尖るが、二条線はない。裏面は細かく成形剥離痕を残したままである。2も頭部の破片であるが、阿弥陀一尊種子と頭部が山形を呈している。二条線の痕跡は窺えない。これは塔婆としても、まだ1次加工の板碑であり、今後、施主は勧進僧等に勧められながら、造立趣旨、偈文、供養者名、紀年銘を依頼して刻出したと考えられる。

下総型板碑は表裏面の縁を成形剥離しているのみで、主尊などの痕跡は窺えない。4は阿弥陀一尊種子と蓮座、5は種子と蓮座の蓮弁を確認できるが6、7は全く加工はなく、素面である。碑面には何も彫っていないが、明らかに板碑の形状を示すことから、紙を貼るかあるいは墨書されていたのだろう。県内では大栄町伊能の長興院に所在する阿弥陀一尊の下総型板碑の紀年銘が墨書で記されていたことが報告<sup>33)</sup>されていることから墨書の可能性もある。

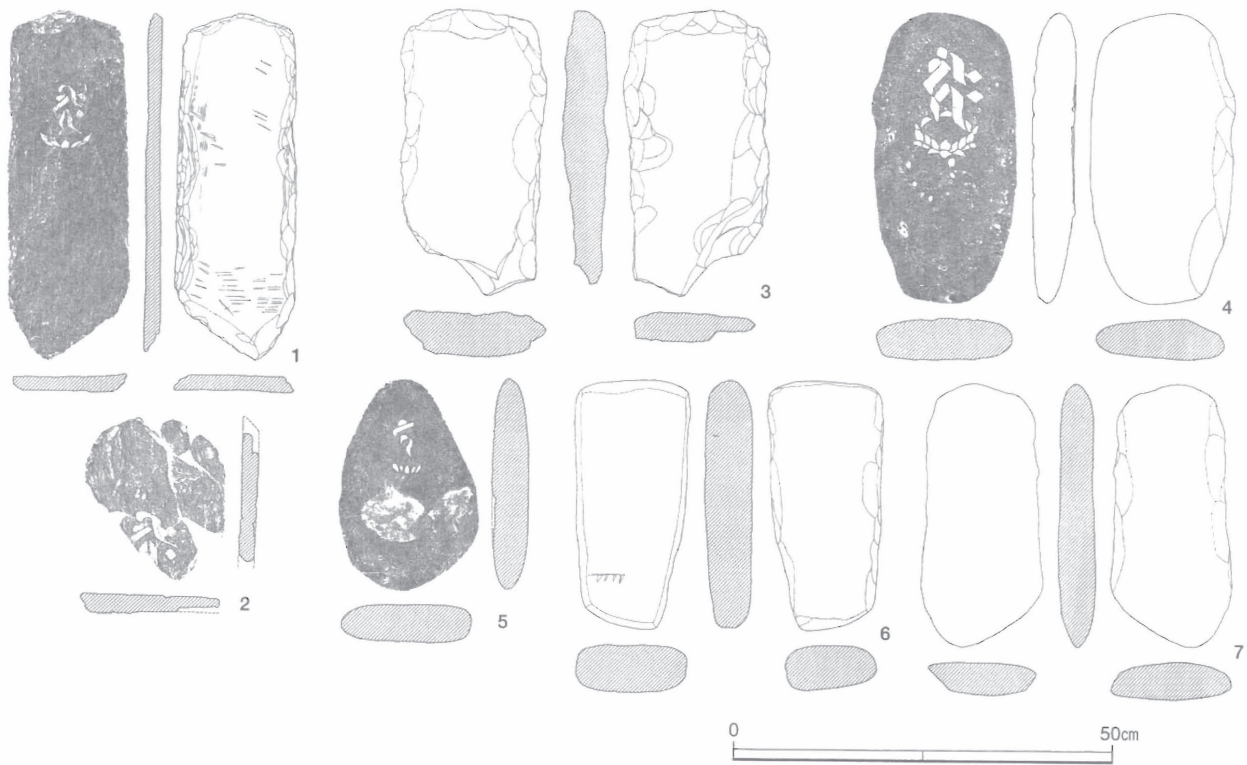
自然石板碑は、小判形もしくは長楕円形状を呈する。この自然石板碑は飯岡石と呼ばれる泥岩製の大型の扁平で長楕円形状の円礫を全く加工することなく、板碑に利用したものである。

##### (3) 城山遺跡出土の板碑群（第5図）

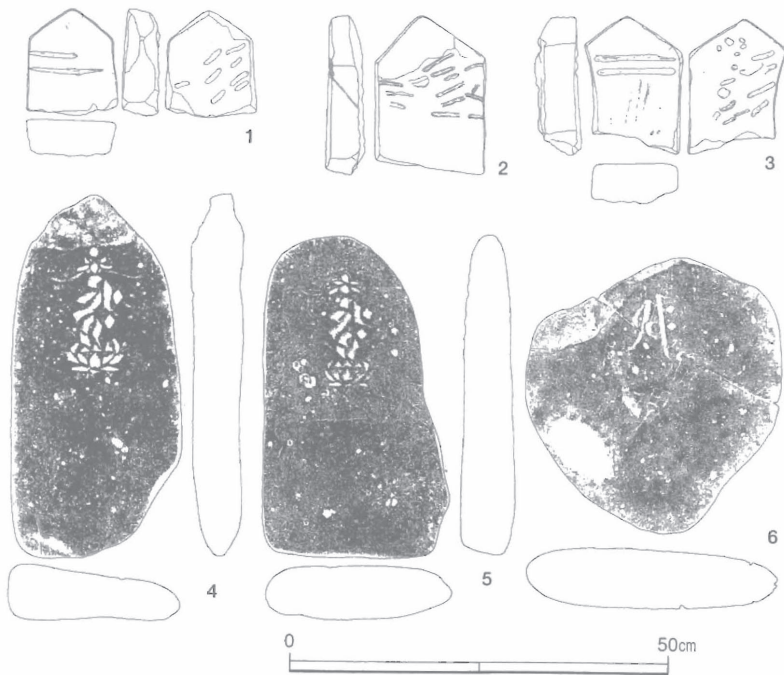
城山遺跡は、匝瑳郡光町篠本字城山1143に所在し、九十九里平野に流下する栗山川の左岸台地上に位置する。

出土した板碑は、緑泥片岩製の武蔵型板碑が4基、砂岩製の在地型板碑は4基、泥岩製の自然石板碑は5基確認された<sup>34)</sup>。しかし、黒雲母片岩製の下総型板碑は確認されない。

1～3は砂岩製の板碑である。完形品は確認されていないが、高さは1尺から1尺5寸の規模であろう。正面には主尊や紀年銘は確認できないが、明確に山形を作り出し、額部の下に二条線を刻んでいることから板碑の要因を充たしている。背面には工具による削りだしの痕跡をそのままにしており、在地型板碑の一形



第4図 台遺跡出土の板碑群 (1/10) (鬼澤他1999)



第5図 城山遺跡出土の板碑群 (1/10) (道澤2000)

態である。

4・5は、自然石の表面を生かして正面上部に天蓋、中央に阿弥陀一尊種子を刻み、その基には蓮座を彫出している。6は勢至種子が確認され、その下部には文字とも記号とも判断つかない擦痕を認める。下面には、

もある。

(5) 生実城跡出土の庚申待板碑 (第7図)

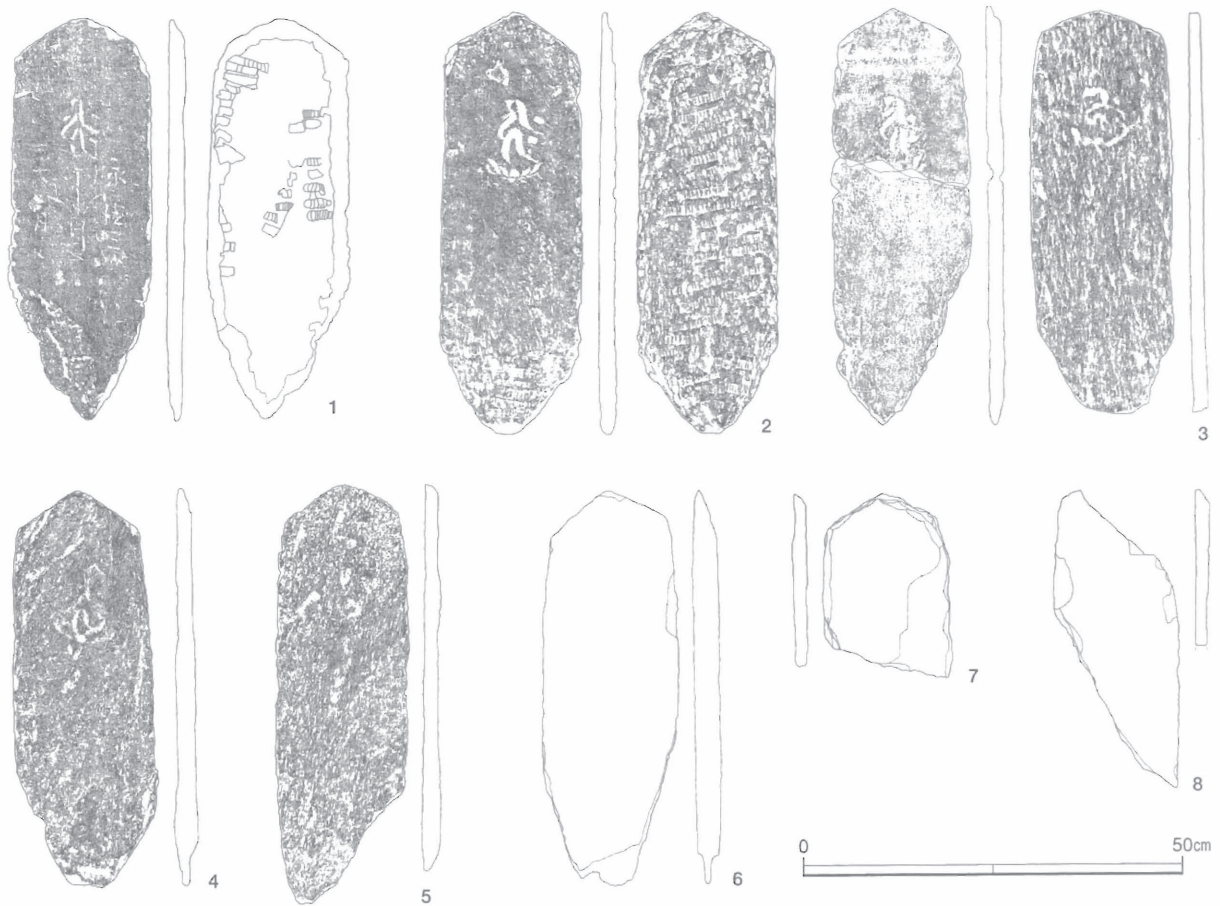
県内で紀年銘の確認できる庚申待板碑は、延徳四年(1492)から天正十四年(1586)までの15基で、地域的には最も東方では下総町小野八幡神社所在板碑<sup>36)</sup>で

紀年銘などは確認できないが、墨書による紀銘があった可能性がある。

(4) 前畑遺跡出土の板碑群 (第6図)

遺跡は東金市丹尾字前畑71-1に所在する。

板碑は8基提示した<sup>35)</sup>がすべて緑泥片岩の武蔵型板碑である。しかし、破片で黒雲母片岩を確認することから、下総型板碑の造立も指摘できる。規模は高さが52cm、幅が16cmから18.5cmを示し、唯一年号が判読できる「永禄三年」(1560)等16世紀中期頃の板碑群である。概ね頭部山形に整え、主尊として阿弥陀種子を刻む以外は紀銘は確認されない。背面はノミ痕をそのまま残していることから、未整形の板碑であった可能性



第6図 前畑遺跡出土の板碑群 (1/10) (香取2002)

あり、南方は千葉市中央区の中村幸一所在<sup>37)</sup>の板碑である。他のすべては柏市、松戸市、流山市、野田市域の江戸川寄りに偏在する様相である。生実城跡出土の庚申待板碑<sup>38)</sup>は武蔵型板碑で、享祿四年(1531)銘は県内では3番目に古く、千葉市内で2例目の発見である。16世紀前半期には、この生実で「十郎三郎 孫二郎——」等百姓と思われる人々が庚申待といった農村の習俗の中で板碑を造立していたことが指摘される。

(6) 清澄山所在の石塔 (第8図)

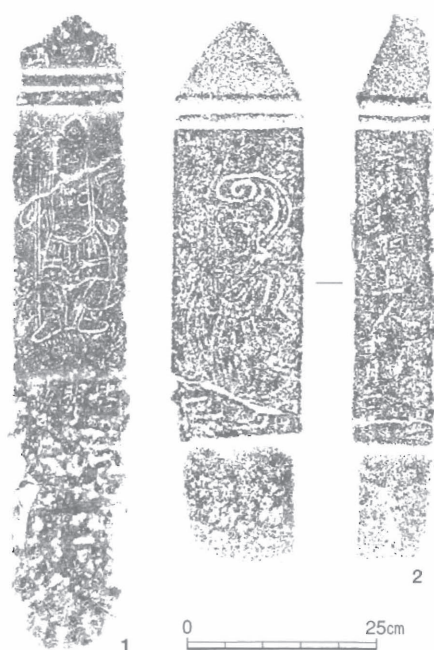
資料は在地の蛇紋岩を用いて、清澄山中に造立されたもの<sup>39)</sup>である。1は高さ86cm、幅16cm、厚さ13cmを測り、頂部を山形に成形し二条線を施す。修験者が入峰に際し、行場に建てる碑伝を思わせる形状である。正面は頭部を碑面より突き出して陽刻し、身体は線刻された像を刻む。右手に宝棒、頭には上が錘形に尖った兜巾をかぶり、袍裳の裾を短くしたような法衣をまとう。右手に宝棒をとり、左手は碑面にひびが入り不明であるが、宝塔を捧げる像容は毘沙門天であろう。足下は短い刻み目が入っており、鬼の上に立つ姿を示しているか判断できない。なお、拓影から山形の額部



第7図 生実城跡出土の庚申待板碑 (1/10) (築瀬1992)

に「□□山」、また、線刻毘沙門天の足下に三行に亘って、「比丘/明了/敬白」と読める。基部は地山に据え付けるように、先端を丸く加工している。報告では応永期と推測している。

2は、高さ77cm、幅18cm、厚さ12cmを測る。頭部を山形にし、二条線を正面と左右両側までまわしている。正面には、線刻による立像と思われるものを認める。その右側には縦方向の線刻痕があり、これは宝剣を持っている像で左手は下がっていて不明瞭、腰から下は



第8図 清澄山所在の石塔 (1/10) (早川2000)

くの字形に法衣が流れ、方形の台座に乗る。顔面の表情は読めない。頭上には左肩から天衣が渦状に表現されている。これらから像容は不動明王と考えられるが如何であろうか。正面の二条線の下には、横位に右から「金□山」、右側面には「其法□聖上人／応永十四年／十月二日」、左側面には、「大勸進□沙門明了／敬白」と読める。方形柱状で下部は尖る埋め込み式である。

資料には、「明了」という僧名が刻まれている。清澄寺の梵鐘(明德参年(1392))には、「幹縁比丘明了」<sup>40)</sup>、宝篋印塔(応永十四年(1407))には、「明了」を願主として房総三原東の住人、小田徳成並びに了榮なる者が造塔した十三基の内の一基であるとしている<sup>41)</sup>。また、「応永甲辰(1424)」建立の石幢<sup>42)</sup>にも「當代住持比丘明了」と記されている。

修験道の痕跡は確認できないとされている<sup>43)</sup>が、「不動明王」の像容は修験道を示している<sup>44)</sup>ので15世紀初頭には清澄の山々にも修験道の山岳信仰を行われていたと理解していいのではないか<sup>45)</sup>。また、「毘沙門天」と考えられる像容は、十二天の中では、北方を守る神とされている<sup>46)</sup>ところから、境界を守護するもの、あるいは霊山の神聖な地域と俗界を分ける標石、いわゆる結界石と考えることもできるのではないか。

## 5. 型式・系統上の位置 (第9図～第12図)

### (1) 主尊, 形状, 装飾, 塔勢, 規模

第9図から第12図は100年単位で、県内に所在する下

総型板碑と武蔵型板碑を拓影図で該当期に示した。上段に武蔵型板碑, 下段に下総型板碑を各60基掲載している。拓影図の中央部分の西暦が掲図した板碑の紀年銘で、幅を持つのでほぼ大まかと捉えたい。拓影図の集中的な重なりはその年代の造立が多いことを示し、余白は、当然造立数が少ないことを示す。なお、第9図の武蔵型板碑を示した上段左には現在最古の紀年銘をもつ、埼玉県大里郡江南町須賀广大沼公園弁天島に所在する、嘉禄三年(1227)銘の板碑と、同じく江南町樋春旧在の寛喜二年(1230)の板碑拓影図を参考で示した<sup>47)</sup>。これらの板碑については、千葉県内所在の板碑の系譜として示すこととした。

改めて本図の内容について確認すると下記の通りである。

- ・拓影という表現方法で統一した。
- ・掲図する縮尺率を1/20に統一して、塔婆としての規模を確認できるように表示した。
- ・板碑発生からの約350年間の全体的変遷を示した。
- ・碑面の主尊等の加工について確認した。
- ・県内の特徴ある板碑の形状を確認した。

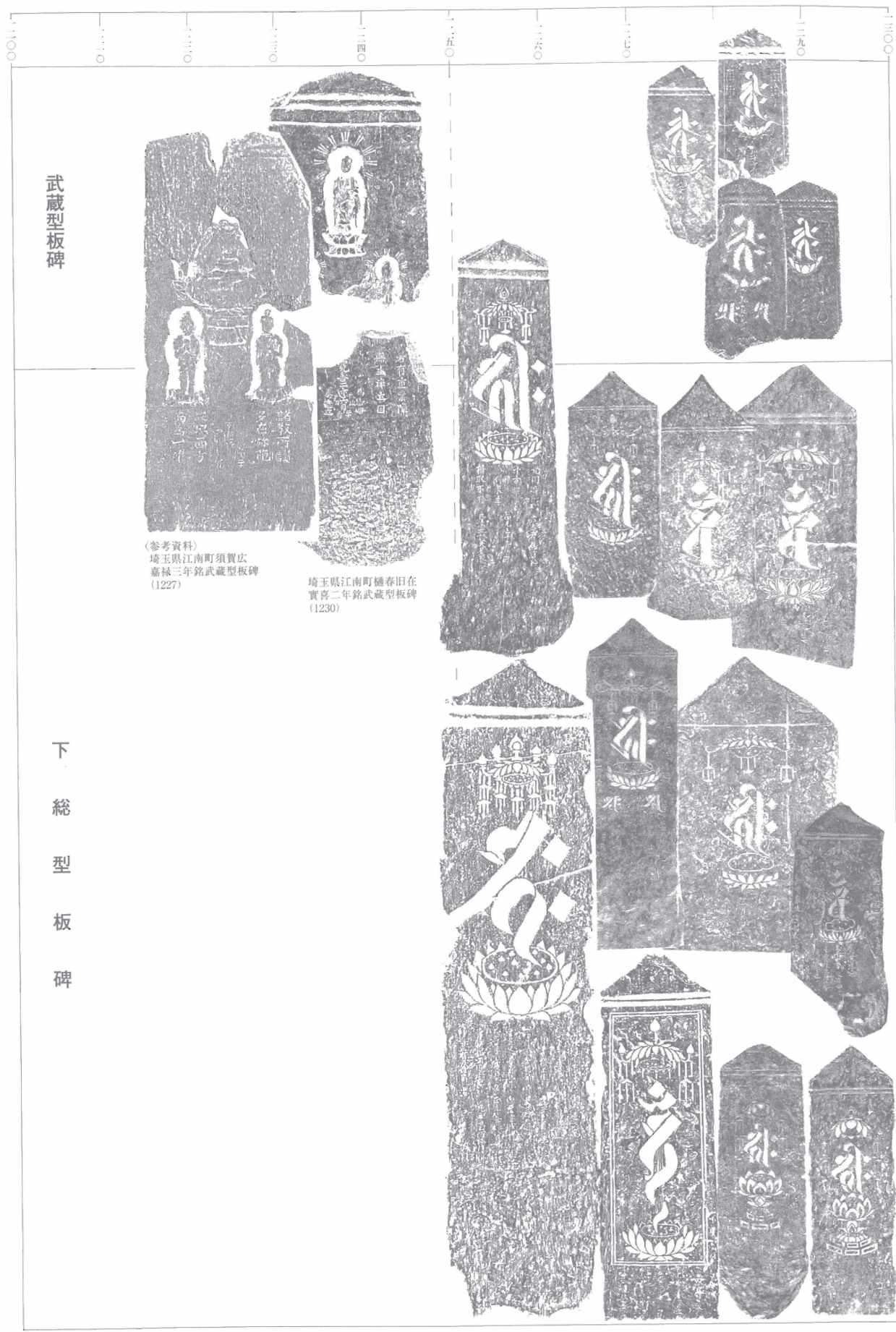
本図から示される事実は、大変多岐に亘るものと判断する。

現在、県内にはどのくらいの板碑が確認されているだろうか。国立歴史民俗博物館による資料集成によると県内には3,855基の板碑が所在するという<sup>48)</sup>。一概には言えないが、武蔵型板碑は約2,400基、下総型板碑は1,300基、その他150余基と捉えられる。

上段の武蔵型板碑の拓影図は主に鎌ヶ谷市の万福寺出土の板碑<sup>49)</sup>を示しているが、その他、船橋市<sup>50)</sup>、千葉市草刈六之台遺跡<sup>51)</sup>、四街道市和良比堀込城跡<sup>52)</sup>出土板碑を掲図した。板碑石材の緑泥片岩の原産地が荒川流域であることからその分布が県西部に偏在している。

県内の武蔵型板碑は、第10図に示すように14世紀に急増しているが、これは、埼玉県下でも同様の傾向を示している<sup>53)</sup>。その後、第11図に示されるように15世紀前半に減少したのち中頃より再び増加するが16世紀に入ると急減する。この様相は埼玉県下とは異なる現象であることから注意される。

13世紀後半の板碑は、それほど多くない。頭部山形で二条線を加え、上幅に比べ下幅がやや幅広である。阿弥陀一尊種子、あるいは三尊種子で蓮座も上に強く開く形である。14世紀になると主尊の阿弥陀種子はやや縦長になり、画一化される様相を示す。枠線を施したのも見受けられ、上幅と下幅がほぼ同じ規模にな



第9図 県内所在板碑の変遷 (1200~1300) (1/20)

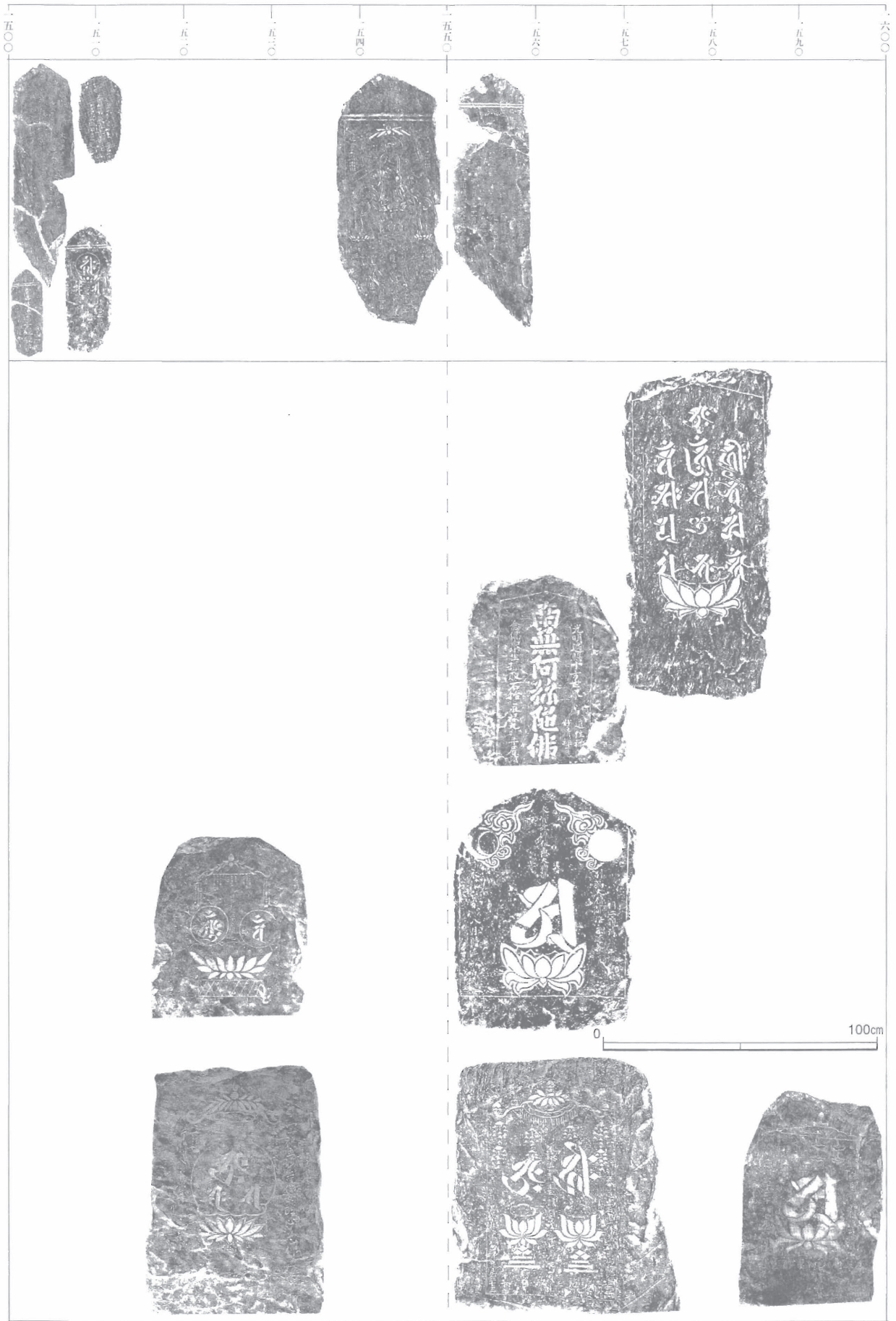




第10図 県内所在板碑の変遷 (1300~1400) (1/20)



第11図 県内所在板碑の変遷 (1400~1500) (1/20)



第12図 県内所在板碑の変遷 (1500~1600) (1/20)

る。蓮座も線刻によるものが見られる。題目板碑も造立される。後半になると高さ25cm前後の小型の板碑も出現、15世紀になると全体的に更に小型化した板碑が多くなる。主尊の彫込みも浅い。蓮座も主尊を受ける座というより形式化した形状となる。後半になると二条線を欠く板碑が多い。16世紀の造立は急減して、前代の形状等引き継いでいる。

下段の下総型板碑の拓影図は、清水長明<sup>54)</sup>、石井保満<sup>55)</sup>両氏の資料を利用させていただいた。下総型板碑の初源は、第9図中央下段に示した小見川町上小堀長泉院の「正元元年(1259)八月廿四日」銘の釈迦種子板碑である。他に正元元年の紀年銘を持つ板碑は、佐原市追野、惣持院跡(第9図中央上部)1基、佐原市地福寺に2基造立される。研究者によっては、武蔵型下総板碑と呼称するように<sup>56)</sup>、武蔵型板碑の形状を踏襲している。13世紀の後半になり、黒雲母片岩の材質を利用して幅広の板碑も造立される。また、五輪塔線刻の板碑も昌福寺正応二年塔(1289)(図版1-3)のように造立される。頭部山形の武蔵型板碑の形状を示すものは1340年頃までで、板碑頭部は平になり、武蔵型板碑の形状を線刻で示す双式板碑(図版1-7, 8)また、頭部を二つの山形に加工した双頭の双式板碑が出現する。14世紀前半には、下総型板碑の特徴的形状である、不整形の四角板状の板碑も出現する。ともかく、武蔵型板碑の頭部山形で長方板状の形に比べ、幅広で厚みがあり、重量的にもボリュームを持つ板碑が出現するのである。武蔵型板碑は主尊の阿弥陀種子は異体字が多いが、下総型板碑は正常の書体が主流である。14世紀中頃に造立数は増すが、その主尊も多様化する。15世紀前半の様式を踏襲して平頭で碑面に線刻で山形の枠線を刻出して中央に主尊を彫りだしている。

年代毎に各部の装飾をみてみたい。まず、13世紀の板碑では、天蓋は逆蓮華形にして蓮肉を彫りだして、蓮実も点彫りしている。また、宝珠を中央に1点、あるいは左右を加えて3点、あるいは5点彫りだす板碑もある(図版1-1)。初発期の板碑の璽は線状に二段三列、あるいは三段五列に下がる(図版1-2)。後半期の板碑は、一段三列も見受けられる。蓮座は主尊を荘厳する意味で花卉を複弁とするものも見受けられる。蓮肉は楕円形、後半期のもは二ヶ所で括れる形状を示す。蓮実は点彫りがほとんどである。須弥壇は末期の板碑に確認され、二段で方形の束石状に線刻したものが出現する。

14世紀の板碑の天蓋は、蓮座と似た形状で規模を縮

めて刻出する。中央に宝珠を配し、璽を下げたために左右に受けが伸び、弧状に先端部が直立する。末期になると形状が傘状を示す板碑もある。璽は点列で垂下するが(図版2-10, 12, 14)、線状に下がるものもある。蓮座の多くは、花卉を丸彫りしているが、前半期の板碑の中には、花卉の中央を残し、重厚さを示すものもある。須弥壇を彫りだしているものは、俯瞰した視点で六角壇状に彫りだしている。

15世紀の板碑の天蓋は、宝珠を中央に立て、蓮座に対称的に1点、あるいは左右を加えて3点掘りだす。璽を受けるため左右にモビール状に線刻する(図版4-28)。璽は点列状に垂下するものが多い。線状に傘を提げるものもある。蓮座は蓮弁が一重で蓮肉は半円形または連弧状に描かれるものもある。蓮実は点彫りがほとんどであるが、丸く線彫りするものも確認する。須弥壇は長方形を積み石状に彫り窪めたものを四列から六列で二、あるいは三段に積む(図版4-29)。なお花瓶を描く板碑も確認される。

16世紀の板碑の天蓋は、中央に宝珠を掲げ、逆蓮華が傘状に広がる。璽を受ける部分は内側に巻き込む(図版4-32)。璽は点列状に垂下するものと(図版4-32)、モビール状に小さな傘を彫りだす(図版4-33)。蓮座は蓮弁を様式化している。蓮肉は連弧状に線刻し内側に蓮実を丸く線彫りしている(図版4-33)が一部、点で刻出するものもある。須弥壇は段形状に積み上げた状態で彫りだしたり、斜め格子状の線刻で描き出す。

時代毎に板碑に荘厳された天蓋、璽、蓮座、須弥壇を概観したが、これは、造立者の意向というよりも身分的、社会的規制<sup>57)</sup>が造立に伴って働いていたと考えられるのではないか。確かに富裕な香取人ではあるが、財力よりもその造立者の立場が優先されていたと考えられる。

## (2) 石材

全国的に概観すると、石塔造立に叶う石材は、広域に供給されるようになり、その一方で地域を限定して流布する石材がある。千葉県内でいえば、前者は武蔵型板碑の緑泥片岩であり、下総型板碑の黒雲母片岩、粘板岩である。後者は在地型板碑の白亜紀砂岩、及び自然石板碑の泥岩、また、県南の嶺岡山系の蛇紋岩である。

前節で紹介した、大慈恩寺、台遺跡、城山遺跡、前畑遺跡、生実城跡出土の板碑を概観すると、利根川に流入する大須賀川に面した大慈恩寺は、黒雲母片岩製

の下総型板碑が主体的に造立され、わずかに武蔵型板碑、在地型板碑を認める。しかし、九十九里浜に流下する栗山川の水系に面する台遺跡は、自然石板碑が主体で武蔵型板碑、下総型板碑は客体である。その栗山川の下流部に立地する城山遺跡は、武蔵型板碑と在地型板碑と自然石板碑が等分に存在する。上総の前畑遺跡は武蔵型板碑が主体で、わずかに下総型板碑造立の痕跡を認める。生実城跡は武蔵型板碑のみである。

県南の鴨川市域に集中して造立された、地元の蛇紋岩製の板碑については、篠崎四郎は「在地産出の岩石を使用した板碑と呼称してよい石塔婆」とし<sup>58)</sup>、川戸彰は「南房総板碑」と名称を付して報告している<sup>59)</sup>。早川正司はその名称を踏襲し、悉皆調査に近い成果を報告している<sup>60)</sup>。

板碑の型式名については、分布範囲を考慮した名称とその板碑の岩種名から呼称する例がある。この「南房総板碑」は造立されている地域から付された名称である。「房総」という地域名は、狭義には房総半島の南半部、富津岬から太東崎を結ぶ以南の範囲とされる。したがって、南房総という呼称は地域を特定するにはきわめて不明瞭と言わざるを得ない。地元産の蛇紋岩を利用していることを考えれば「在地型板碑」が一般的に理解する上で適切と考える。

在地産の石材を用いて板碑を製作する例は、東京都あきる野市を中心とした伊奈石板碑<sup>61)</sup>、神奈川県津久井産の凝灰質砂岩製板碑<sup>62)</sup>、栃木県の奥羽式板碑<sup>63)</sup>等がその例である。これらは石材として加工しやすい凝灰岩、砂岩を用い、石材としての流通も限られており、一様に中世の15世紀を中心とした造立である。これらの呼称は地域名を付す考えもあるが、筆者は塔婆造立の観点から「在地型板碑」とし、総称して位置付けるのがよいのではないかと考える。

### (3) 下総型板碑に記された僧位、僧職

権僧都	1486
大僧都	1526～1606
大徳	1340～1620
沙弥	1305～1363
比丘尼	1302～1439
和尚	1569, 1591, 1595
禅門	1343～1610
禅定門	1371～1623
禅尼	1342～1600
禅定尼	1419～1623
少僧都	1448, 1532, 1533

大師 1481

### (4) 下総型板碑に記された人名

- 「丹治□」「丹治廣」正元元年(1259)地福寺(佐原市)
- 「丹治氏女」□不明 高德寺(大栄町)
- 「荊田守氏」弘安七年(1284)香取力三墓地(佐原市)
- 「藤原太郎」正安四年(1302)善光寺(小見川町)
- 「中臣家真」乾元二年(1303)地藏院(佐原市)
- 「紀氏女」文保三年(1319)引地路傍(佐原市)
- 「藤原行信」元亨三年(1323)浄土寺(佐原市)
- 「大仲臣有信」「藤原氏女」「大中臣氏」正中三年(1326)山之辺路傍(佐原市)
- 「円心 観阿 経阿 定西 法阿 念阿 建阿 善如」元徳二年(1330)大慈恩寺(大栄町)
- 「朗海上人」元弘三年(1333)観音教寺(芝山町)
- 「大仲臣国□」延元元年(1336)地福寺(佐原市)
- 「藤原氏妙□ 妙高」康暦二年(1339)新部墓地(佐原市)
- 「六郎十郎 同女房妹」暦応二年(1339)鳥羽墓地(佐原市)
- 「鏡円」暦応三年(1340)大慈恩寺(大栄町)
- 「妙日」「妙円」暦応四年(1341)円静寺(八日市場市)
- 「藤原一族 尼三郎 左門三郎」延文三年(1358)満福寺(佐原市)
- 「平氏女」延文三年(1358)知足院(佐原市)
- 「左近三郎 他」延文四年(1359)小松墓地(神崎町)
- 「高階氏女」貞治二年(1363)稲荷神社(佐原市)
- 「□山休公大師」応永十八年(1411)薬師堂跡(大栄町)
- 「和田道金」享徳元年(1452)福壽院跡(小見川町)
- 「道金」文明三年(1471)大竜寺(佐原市)
- 「頭白上人」文明十八年(1486)入定塚(佐原市)
- 「手子 辰子 又太郎 三郎四郎 栄祐 孫四郎」延徳四年(1492)八幡神社(下総町)
- 「五郎 太郎 彦七郎」天文十八年(1549)不動山(佐原市)
- 「藤原太郎 成子小衛門 小成 心發意 そと 仲子 美濃房 心發意美濃一郎」天正九年(1581)宝蔵院(佐原市)
- 「太郎兵衛」文禄三年(1594)観福寺(佐原市)
- 「分飯司實重朝臣」慶長三年(1598)惣持院墓地(佐原市)
- 「原河孫平法金」慶長五年(1600)大法寺(佐原市)

「金田石見守」元和四年（1618）慈眼寺（佐原市）

丹治銘の板碑は2基確認される。千々和到は加治氏が武藏型板碑の初発期の段階で係わりを持つことを指摘している<sup>64</sup>。地福寺の正元元年（1259）銘の板碑は、武藏型板碑との関係を追う資料として、貴重である。大栄町内高德寺に所在する阿弥陀曼陀羅板碑<sup>65</sup>も紀年銘は不明であるが13世紀中頃の所産と考えられる。今後、下総型板碑の初源を求める資料として注目したい。

下総の香取社に係る人々としては、香取社を氏神としていた摂関家藤原氏、また、大宮司職を勤めていた大中臣氏があげられる<sup>66</sup>。したがって、「藤原太郎」「藤原行信」「大仲臣宥信」「藤原氏女」「大中臣氏」等は香取神宮との関係を持つ人々であり、14世紀前半期に板碑を逆修等で造立していた。

また、在地豪族や香取神宮の神官の他、僧侶の供養例がある。芝山観音経寺「朗海上人」などがこの例である。

## 6. 板碑造立の背景

中世の宗教生活は、ほとんどの人は文字の読めないという中で「語りの宗教」であるという指摘がある<sup>67</sup>。遊行僧や聖が仏法を語るに際して阿弥陀像や種子阿弥陀図を携帯し人々を前にして、絵解きに使用したと考えられる<sup>68</sup>。また文献では『吾妻鏡』の正治二年（1200）正月13日条に北条政子が頼朝一周忌に阿字梵子を刺繍して一軸を製作したと見える<sup>69</sup>ことなどから、信仰の一端を垣間見ることができる。

下総型板碑が多く所在するこの香取地域の13世紀から16世紀にかけての時代背景はどのような状況であったらうか。

この地域の信仰活動を具体的に示す遺物として、香取郡西部の大栄町や神崎町から仏教遺物が周密的に見られている。7世紀後半の押出仏<sup>70</sup>や平安時代の十一面観音像菩薩立像や菩薩立像<sup>71</sup>が、また、神崎町の谷津遺跡<sup>72</sup>では南北朝時代の銅製聖観音像と銅板線刻仏が出土している。したがって、地域的にも街道、あるいは“香取海”に接して文化の受容しやすい利点があったのであろう。

こういった展望の中で「蔵本<sup>くらもと</sup>」と呼ばれる、香取海を介しての水運や商品流通による富を基礎として金融業を行った人々の存在を指摘されている<sup>73</sup>。いわゆる「有徳人<sup>うとくじん</sup>」と称し、豊かな香取を具現してくるのである<sup>74</sup>。また、南北朝の応安期（1368～75）、香取社と千葉氏の二つの領主間に不服従の誓約状の形で申し入

れをしていることから、佐原宿に関しては、両者の統治から離れて、比較的自由であったという報告もある<sup>75</sup>。

確かに服部清道が指摘するように<sup>76</sup>、板碑造立者の多くは「仏教知識については極めて乏しいものであり」、「仏教伝道者に勧められるまま」板碑を受動的に造立したかもしれないが、状況は多様であったらう。

この香取地域で阿弥陀の信仰を受入れ、それを板碑に結びつけていったのはどういう人々だったのだろうか。経済的にも裕福であった中世の香取人、具体的には経済基盤を持つ在地豪族、香取神宮の神官、僧侶等が板碑造立の原動力であったのであろう。

## 7. 終わりに

休日を利用してながら県内の板碑を少しずつ回ってきた。異動により職場を替わり現地調査が遠退く時もあったが、確認されているすべての板碑を調査することを目標にした。しかし、未だ志半ばである。近年は板碑が発掘されることもあり、発掘調査報告書の内容が、板碑研究者の眼に触れることがないのも今回投稿の一つの理由であった。

発掘調査報告書が刊行されてのち、収蔵庫に納められた板碑や五輪塔がある。是非とも供養という造立目的を示すために野外展示に供するなど、野に建つ石塔としたら如何かと思う。

古文書等を解読しながら論を進める研究手法をとらない筆者であるが、板碑の碑面に記された人物を意識しながらその人々が生きた時代を、板碑を通して研究していきたいと思う。

本文中では、敬称をすべて省略させていただいた。

## 謝辞

今回、調査するに当たり、多くの方々の協力を得た。板碑の実見でお世話になった東総文化財センター宮内勝巳氏、白崎智隆氏、大栄町教育委員会、藤崎貴之氏、文献でお世話になった久保木良氏、石橋良子氏、貴重な資料集を寄贈された石井保満氏、中世香取の時代背景についてご教示願った内田龍哉氏、挿図のトレースで協力を得た須藤美智子氏、快く板碑資料の実見、写真撮影を了解された各板碑の所蔵者には、お礼申し上げます。特に、多古町南中、妙光寺のご住職夫人には夏の暑い最中の調査でいろいろご配慮いただいた。

## <付記>

第13図は、中世香取の板碑の立つ風景を描いたものである。下総型板碑が3基、その間に宝篋印塔が1基立ち、付近には板塔婆が数本立ち並んでいる。板碑は黒雲母片岩で2基が方形板状板碑、1基が頭部山形にした双式板碑である。時代的には14世紀中頃、宝篋印塔は大変大型で立派すぎるし、香取地方には確認されていないが、景観としてご容赦願いたい。

## 注

- 1) 千々和実編『上野国板碑集録(全)』1977
- 2) 千々和実編『東京都板碑所在目録』(23区分) 1979, (多摩分) 1980
- 3) 埼玉県立歴史資料館編『板碑—埼玉県板石塔婆調査報告書』1981
- 4) 野田市編さん委員会「民間信仰を中心とする野田市金石資料集」野田市編さん委員会調査史料・第二集 1967
- 5) 野田市郷土博物館『野田の板碑—附・中世の野田—』1974
- 6) 船橋市郷土博物館『板碑』1979
- 7) 印西町教育委員会『印西町の板碑』印西町石造物第1集 1979
- 8) 松戸市文化ホール『板碑』1981
- 9) 八日市場市教育委員会『八日市場市史 上巻』1982
- 10) 芝山町史編纂準備室『芝山町石造文化財調査報告』1982
- 11) 大森義朗「鎌ヶ谷市の板碑」房総の石仏2, 1983
- 12) 谷島一馬「市原の板碑」市原地方史研究14 1986
- 13) 戸向朝夫『野田の板碑』野田市郷土博物館 1987
- 14) 川戸 彰「関宿町の板碑」関宿町史研究1, 1988
- 15) 市立市川歴史博物館『市川の板碑』1990
- 16) 下総町『下総町史 原始古代・中世編資料集』1990
- 17) 神崎町『神崎町史 史料集金石文等』1991
- 18) 大栄町『大栄町史 史料編Ⅰ中世』1995
- 19) 早川正司『天津小湊の石造物』天津小湊町 2000
- 20) 川戸 彰「千葉県」『板碑の総合研究 2 地域編』1982
- 21) 清水長明『下総板碑』庚申懇話会 1984
- 22) 注21に同じ
- 23) 早川正司「南房総板碑小考」千葉文華 第27号 千葉県文化財保護協会 1992
- 24) 阪田正一「旧下総国千田庄の下総型板碑新例」考古学論究 第6号 立正大学考古学会 1999  
阪田正一「中世千田庄の題目板碑」考古学論究 第7号 立正大学考古学会 2000  
阪田正一「下総における題目板碑の造立過程」考古学論究 第8号 立正大学考古学会 2002
- 25) 石井保満「下総板碑発生の研究(上)・(中)・(下)」史迹と美術602, 603, 604 1990  
石井保満「[[史料紹介] 未紹介の下総板碑(一)~(四) 史迹と美術615, 620, 628, 636 1991 1993  
石井保満「正嘉二年銘の下総板碑小考」史迹と美術674 1997
- 26) 石井保満「下総板碑の体系について」千葉県立大利根博物館調査研究報告第2号 1987
- 石井保満「名号文字絵板碑考」千葉県立大利根博物館調査研究報告第4号 1991
- 石井保満「下総板碑における双式板碑小考」千葉県立大利根博物館調査研究報告第7号 1997
- 27) 千葉県企画部県民課『千葉県史料, 金石文篇Ⅲ』1980
- 28) 注18に同じ
- 29) 黒沢哲郎『大慈恩寺遺跡』大栄町教育委員会 1993
- 30) 注18に同じ
- 31) 鬼澤昭夫, 荒井世志紀『主要地方道成田小見川鹿島港線—沢工区の埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)香取郡市文化財センター調査報告書第66集 1999
- 32) 注27に同じ
- 33) 注18に同じ
- 34) 道澤 明『篠本城跡・城山遺跡』(財)東総文化財センター発掘調査報告第21集 2000
- 35) 香取正彦他『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書 9 東金市前畑遺跡・羽戸遺跡』(財)千葉県文化財センター調査報告第428集 2002
- 36) 注16に同じ
- 37) 注27に同じ
- 38) 築瀬裕一「生実城跡」『千葉県の歴史 資料編中世1 考古資料』1992
- 39) 注19に同じ
- 40) 注27に同じ
- 41) 拙著「房総宝篋印塔考」物質文化35 1980
- 42) 注27に同じ
- 43) 有元修一「清澄寺と中世安房の仏教」『ふるさと資料天津小湊の歴史上巻』1998
- 44) 由木義文「不動明王」『修験道辞典』1996
- 45) 時枝務「修験道の板碑」『板碑の総合研究1 総論編』1983
- 46) 由木義文「毘沙門天」『修験道辞典』1996
- 47) 有元修一, 比留間博「陽刻像板碑の類例と嘉禄銘板碑の復元」埼玉県立博物館紀要—11 1985
- 48) 平成7・8年度「考古学の情報集成的研究」
- 49) 万福寺板碑発掘調査団『万福寺板碑発掘調査報告書』鎌ヶ谷市教育委員会 1985
- 50) 注6に同じ
- 51) 小林信一「中近世の遺物」『千原台ニュータウンⅥ—草刈六之台遺跡』(財)千葉県文化財センター調査報告第241集 1994
- 52) 印旛郡市文化財センター『千葉県四街道市和良比遺跡発掘調査報告書』1991
- 53) 有元修一「埼玉県」『板碑の総合研究 2 地域編』1983
- 54) 注21に同じ
- 55) 石井保満『佐原市所在の下総板碑』2000
- 56) 注16に同じ
- 57) 大石直正「板碑の史料学のため—仙台市の事例から」古文書研究第50号記念特集号 1999
- 58) 注27に同じ
- 59) 注20に同じ
- 60) 注23に同じ
- 61) 千々和到『多摩市の板碑』1997
- 62) 大貫英明「北相模の板碑」國學院大學考古学資料館紀要 第19輯 2003
- 63) 渡辺竜瑞「栃木県」『板碑の総合研究 2 地域編』1982
- 64) 千々和到『板碑とその時代—てぢかな文化財・みぢかな中世—』平凡社選書116 1988

- 65) 注18に同じ
- 66) 川尻秋生「香取大中臣氏と鹿嶋中臣氏ー古代末期の香取神宮神主職をめぐってー」佐原の歴史創刊号 2001
- 67) 大隅和雄「信心の世界・遁世者の心」『日本の中世2』 2002
- 68) 石田茂作「浄土教美術」『仏教美術の基本』東京美術 1981
- 69) 吾妻鏡第十六, 正治二年正月, 頼朝一周忌  
「~, 故幕下將軍周?の御忌景を迎へ, かの法花堂において佛事を修せらる。北條殿以下の諸大名群参して市をなす。佛は繪像の釈迦三尊一鋪, 阿字一鋪。御臺所の御除髪をもって, これを縫ひたてまつる。経は金字法華経六部, 摺寫の五部大乘経」  
黑板勝美編『吾妻鏡第二』1977
- 70) 佐原市教育委員会『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅱ』 1988
- 71) 埼玉県立博物館『甦る光彩ー関東の出土金銅仏』1993
- 72) 荒井世志紀『谷津遺跡』(財)香取郡市文化財センター調査報告書第31集 1995  
香取郡市文化財センター「南北朝期の仏 谷津遺跡出土の銅製聖観音立像と銅板線刻仏」加止里第7号 2002
- 73) 小森正明「中世後期東国における商業史の一視点 香取社領の蔵本を素材として」史境第22号 1991
- 74) 市村高男「中世東国における房総の位置」千葉史学第21号 1992
- 75) 山本直彦「砂州上に発達した中世の佐原」『図説, 千葉県歴史』1989
- 76) 服部清道「武蔵系・常総系板碑の分布とその識別(2)」湘南考古学同好会々報36 1989



第13図 中世香取の板碑の立つ風景



## 図版解説

### 図版 1

- 1 所在地 香取郡多古町谷三倉 みょうけんさま 妙見様  
文永二年 (1265)  
黒雲母片岩, 高さ118cm, 幅37cm  
※筆者発見
- 2 所在地 佐原市山之辺 香取力三氏宅墓地  
弘安七年 (1284)  
黒雲母片岩, 高さ159cm, 幅49cm, 厚さ10cm
- 3 所在地 香取郡下総町西大須賀 しゅうふくじ 昌福寺  
正応二年 (1289)  
黒雲母片岩, 高さ148cm, 幅67cm, 厚さ8cm
- 4 所在地 佐原市大戸 ちふくじ 地福寺  
正応四年 (1291)  
黒雲母片岩, 高さ96cm, 幅38cm, 厚さ6cm
- 5 所在地 佐原市大戸川 じょうどじ 浄土寺  
永仁六年 (1298)  
黒雲母片岩, 高さ123cm, 幅53cm, 厚さ7cm
- 6 所在地 佐原市大戸川 ぜんしゅうじ 禪昌寺  
正安元年 (1299)  
黒雲母片岩, 高さ263cm, 幅9cm, 厚さ16cm
- 7 所在地 佐原市新市場 じぞういん 地藏院  
乾元第二年 (1303)  
高さ181cm, 幅80cm, 厚さ6.5cm
- 8 所在地 佐原市香取 しんぶくじ 新福寺  
正和五年 (1316)  
黒雲母片岩, 高さ116cm, 幅62cm
- 9 所在地 佐原市西和田 ばいりんじ 梅林寺  
天亨元年 (1321)  
黒雲母片岩, 高さ104cm, 幅45.5cm 厚さ6cm

### 図版 2

- 10 所在地 成田市成田 しんしゅうじ 新勝寺  
延元元年 (1336)  
黒雲母片岩, 高さ110cm, 幅75.8cm
- 11 所在地 八日市場市安久山 あぐやま えんせいじ 円静寺  
暦応四年 (1341)  
黒雲母片岩, 高さ53cm, 幅73cm
- 12 所在地 香取郡小見川町野田 いのうしゅう 稲生社  
暦応四年 (1341)  
黒雲母片岩, 高さ170cm, 幅37cm, 厚さ59cm
- 13 所在地 八日市場市安久山 円静寺  
暦応□年 (1342?)  
黒雲母片岩, 高さ106cm, 幅80cm
- 14 所在地 香取郡大柴町吉岡 だいじおんじ 大慈恩寺  
貞和四年 (1348)  
黒雲母片岩, 高さ111.5cm, 幅57cm, 厚さ6cm
- 15 所在地 香取郡多古町南中 にちほんじまえばち 日本寺前墓地  
観応二年 (1351)  
黒雲母片岩, 高さ145cm, 幅82cm
- 16 所在地 八日市場市生尾 おいお こうふくじあと 光福寺跡  
観応三年 (1352)  
泥岩, 高さ171cm, 幅91cm, 厚さ18cm
- 17 所在地 香取郡大柴町吉岡 大慈恩寺  
文和二年 (1353)  
黒雲母片岩, 高さ117cm, 幅68cm, 厚さ11cm
- 18 所在地 佐原市牧野 かんぶくじ 観福寺  
延文三年 (1358)  
黒雲母片岩, 高さ122cm, 幅72cm

### 図版 3

- 19 所在地 香取郡小見川町栄町 <sup>たいし どうまえ</sup> 大師堂前  
延文五年 (1360)  
黒雲母片岩, 高さ106cm, 幅84cm
- 20 所在地 香取郡大栄町吉岡 大慈恩寺  
延文六年 (1361)  
黒雲母片岩, 高さ83.5cm, 幅49cm, 厚さ13cm
- 21 所在地 香取郡神崎町大貫 <sup>こうふく じ</sup> 興福寺  
貞治三年 (1364)  
高さ120cm, 幅86cm
- 22 所在地 佐原市森戸 大法寺  
貞治四年 (1365)  
黒雲母片岩, 高さ49cm, 幅44cm, 厚さ5cm
- 23 所在地 八日市場市大寺 <sup>りゅうび じ</sup> 龍尾寺  
応安元年 (1373)  
泥岩, 高さ178cm, 幅91cm, 厚さ14cm
- 24 所在地 香取郡小見川町油田 <sup>あふら だ こうかい どうわき</sup> 油田公会堂脇  
永徳四年 (1384)  
黒雲母片岩, 高さ214cm, 幅132cm
- 25 所在地 佐原市新部 兒塚  
康応元年 (1389)  
黒雲母片岩, 高さ185cm, 幅103cm, 厚さ18cm
- 26 所在地 銚子市正明寺町 称讚寺跡  
康応二年 (1390)  
泥岩, 高さ121cm, 幅61cm
- 27 所在地 香取郡多古町南中 <sup>みくこう じ</sup> 妙光寺  
応永廿八年 (1421)  
黒雲母片岩, 高さ113cm, 幅91cm

### 図版 4

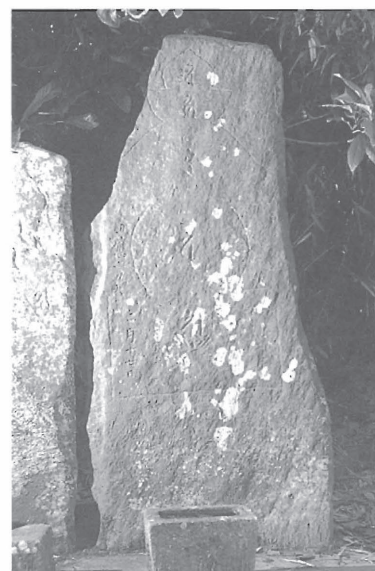
- 28 所在地 八日市場市中央 <sup>けんとく じ</sup> 見徳寺  
永享二年 (1430)  
黒雲母片岩, 高さ85cm, 幅61cm
- 29 所在地 匝瑳郡光町台 宗龍寺  
永享九年 (1437)  
黒雲母片岩, 高さ87cm, 幅65cm
- 30 所在地 香取郡小見川町一之分目 善雄寺  
永禄二年 (1559)  
黒雲母片岩, 高さ87cm, 幅90cm
- 31 所在地 香取郡小見川町一之分目 善雄寺  
永禄七年 (1564)  
黒雲母片岩, 高さ88.5cm, 幅79cm
- 32 所在地 佐原市香取 不断所跡  
永禄十二年 (1569)  
黒雲母片岩, 高さ104cm, 幅86cm, 厚さ10cm
- 33 所在地 香取郡神崎町武田 妙楽寺  
慶長十年 (1605)  
黒雲母片岩, 高さ85cm, 幅50cm
- 34 所在地 香取郡神崎町武田 妙楽寺  
文安五年 (1448)  
黒雲母片岩, 高さ82cm, 幅95cm
- 35 所在地 香取郡小見川町織幡 密蔵寺跡  
紀年銘 無銘  
黒雲母片岩, 高さ62cm, 幅78cm, 厚さ11cm



1 阿弥陀一尊種子板碑 (著者発見)



2 阿弥陀一尊種子板碑



3 五輪塔線刻板碑



4 阿弥陀一尊種子板碑



5 阿弥陀・大日二尊種子板碑



6 胎藏界大日・阿弥陀・釈迦種子板碑



7 両界(胎藏・金剛)大日如来種子双式板碑



8 阿弥陀一尊種子双式板碑



9 阿弥陀一尊種子板碑



10 阿弥陀三尊種子板碑 (県指定文化財)



11 題目三尊双式板碑



12 両界 (胎藏・金剛) 大日如来種子板碑



13 題目三尊双式板碑 (山形)



14 阿弥陀三尊種子双式板碑



15 題目三尊板碑



16 胎藏界大日種子板碑



17 阿弥陀一尊種子板碑



18 阿弥陀三尊種子双式板碑



19 胎藏界曼陀羅板碑



20 阿弥陀一尊種子双式板碑



21 十仏種子板碑



22 阿弥陀一尊坐像板碑



23 阿弥陀一尊種子板碑



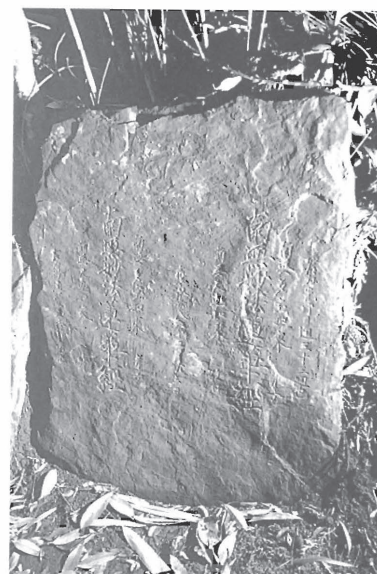
24 釈迦一尊種子板碑



25 十三仏種子板碑



26 阿弥陀種子板碑



27 題目双式板碑



28 阿弥陀·积迦·地藏·薬師種子板碑



29 阿弥陀三尊種子板碑



30 阿弥陀一尊来迎像·金刚界大日種子双式板碑



31 名号板碑



32 阿弥陀·虚空像双式板碑



33 阿(ア)字一尊種子板碑



34 文字阿弥陀像板碑



35 二連双式板碑